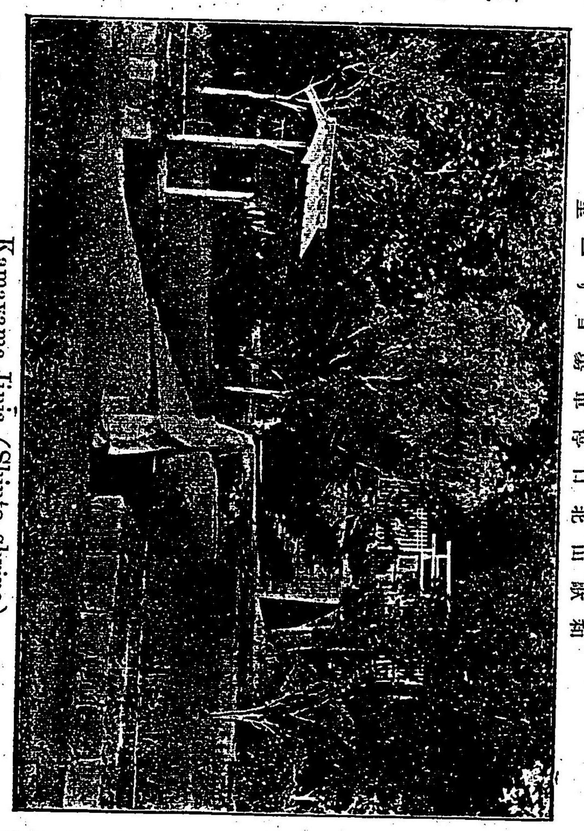
重なる夫をよらせ進んで九ひまひ紀の國に入り吾れ大丈夫にしが、其の腹や痛み奴こいよ〳〵の手に



里一ノ　和歌山市北山電鉄　神社口

Kamayama Jinja (Shinto shrine).
About two miles from Wakayama-Kitaguchi Station.

血を記あり洗つて、ひ今に南に至るの力にまで廻りら孝泉の海血沼を惚海血沼に至つて血ぐさの沼其の剛手の





死んやと、男詰に詰びたまひ(此男詰び賜ひし所を、紀の國の城の水門と和泉の國の城の水門の兩説あり、案内者は和泉の説に從ふ)ひに崩りたまひしが、此地に埋葬し奉り、併せて御社を建齋き奉つたのである、鳴呼命にして流矢の爲に崩りたまはずば、天が下しろしめされ、日本の人皇の始めと仰がれ賜はんに、痛みても哀みても尚あまりあり、此事は和泉の城の水門の所にて、古事記日本書記を引て詳しく申してれきましたが、此は命の御社ゆゑ更に夫を和らげて申しのべました)延喜式神名帳に竈山神社と記され、又本國神名帳に、從四位上、竈山神とある、又延喜諸陵式に竈山墓、彦五瀨命、紀伊國名草郡にあり、兆域西一町、南北二町、守戸三煙とあれば、古は朝廷の尊崇も篤かつたのですが、中古は頽廢して、御墓の在所も定かならず、僅に土地の産土神として崇められたまひしが、維新の御世となつて、御墓も定かになり、去る十五年に立派に營繕成り、初めは村社なりしも、十八年四月に官幣中社に列せられ、廿九年九月、社地取廣げ社殿新造の事を願ひ、卅年三月廿九日許可あり、着手は六月中旬より、六ケ月の間に落成の筈、社殿の新造と共に神威も いよ〳〵著明になり、恐れながら命の靈も空かけりて嬉みたまふべく察せ

られ、案内者もいさゝか袖の涙の量を減らしました――國學の大家本居宣長、同太平の兩大人も、昔此社に參拜して、宣長大人は

をたけびの神代の御聲おもほへて嵐はげしき竈山の松

と感慨し、太平大人は

彦五瀬神の命の遠御代の古事しのぶこれの加麻夜麻

と悲憤されました、今日官幣中社に列せられ、御墓も營繕され、社殿新造の盛擧ある折に參拜してさへ、たのゞと涙の袖をぬらすなるに、頽廢の當時に於て、日本魂あつき大人たちの參拜ありしなれば、其心の中さぞと思ひやられます、此兩大人達の詠れし二歌は、太平大人の筆の迹をそのまゝ石に彫りて、御墓地の内に建てある、又太平大人自筆の軸も本社にある、此御社に參拜して古事を忍ぶにつけ

美都美都斯、久米能古瓦賀、加岐母登爾、宇惠志波土加美、久知比々久、和禮和和須禮士、字知呈斯夜麻牟

と謂ひて、神武の皇が兄五瀬命の死を悼たまひし其御心さへ察しられ奉りて、是も亦涙の量の增る料である、右の御歌の意を、婦女童幼等の爲に判り能く申せば、美都々々斯とはみちゝたるにて、久米部の軍營の





垣の下に植し薑の、みちゝたるを御見はして、薑は食へば口の疼くものゆゑ、其疼のさりがたきが如く、五瀬命の長髓彦が矢を負て崩りませし慨たさは、我世の限り忘れまじければ、かれを聖ぞと、曰まふたのである其御痛憤の御心御詞の上にあくまで現れてをります、心ある人は是非一回此お社を參拜して、古事を忍びたまへ、此お社は、名草郡三田村大字和田にある、和歌山を距ること僅に一里二十町、日前宮より一里に足りません、大祭は九月十三日、寫眞は御墓の前を採影しました。

## 伊太祁曾神社

は名草郡西山東村大字伊太祁曾にある、和歌山市を去ること二里十七町、竈山神社より一里餘、祭神は五十猛命、大屋津姫命、抓津姫命の三座、延喜式神名帳に伊太祁曾神社と記され、本國神名帳には正一位勳一等、伊太祁曾神社とある、其他文德實錄、三代實錄、日本紀略等に御贈位の事を記され、昔は朝廷より紀伊國の一の宮と尊まれ、中古は山東莊の產土神と祟められ、維新の後は國幣中社に列せられました、十月十五日御例祭、一月十五日卯杖式、競馬、四月十一日春季祭、四月廿五日御種下

りの御は行はれ、祭の例は流鏑馬、渡御は頗る盛んなる馬、大なる御前で行はれ、今も古の例の山道

東ノ社神曾祁太伊東山
丁坪里二リヨ堺耳停口北山駅和

Itakiso Jinja (Shinto shrine), Santō. About six miles from Wakayama-Kitaguchi Station.

七月十日夏季祭、十二月十日冬季祭、此の社





東の莊は更なり、和歌山地方よりも参拜の人雲の如くに集り、非常の賑ひを極めるといふ、社殿は天正十五年國幣中社に昇格の後、翌十九年大修繕を加へ、去る十八年國幣中社に昇格の後、其後紀藩の鼻祖南龍公修繕を加へられ、社殿の正面の彫物(南龍公寄附)のみ古物を殘し、其他は總て新築といふも可なりの結構、社地の概畧を述れば、頗る美麗を極め、鳥居の内に反橋を架け、石段を登つて樓門あり、樓門を越ゆ又石段を登つて社殿あり、社殿に向つて左手の方に、友人政岡松濤の筆の大きな額があげてある、之を見て思ひがけなく其人に逢ふた心地がしました、掘社末社棟を連ね、神官の家軒を双べ、花卉は香を吐き樹木は陰をなし、清淨にして開豁、何處となく住吉の社の趣ありて、神さびたりと云んより、寧ろ陽氣にて、陰晴を嫌はず參拜の人雑沓し、神樂の聲常に庭に充ち、その神德のいやちこなるを知るに足ります、此お社の社の神は、神代の時より此地に鎮座ましく、此國を木の國といふも、全く此三柱の神のおはします爲めである、此三柱の神は素盞烏尊の子にまして〳〵て、父の素盞烏尊と共に、始め新羅國に天降りました時、多くの樹種を持て下られたれど、之を其國に植ず盡く之を持歸つて、築紫より始めて、凡て大八洲國の内に播植ゑ

たまはざる刀もなく、終りに此國に來つて鎮りましたのである、三柱と
も木に有功ある御神ゆゑ、即て其地をも木國と名けたのである、五十猛
命の御名は、五十は繁きことをいひ、猛は速かなるにて、此御神の功用
しげ〳〵すみやかなりといふ稱である、之に因れば、伊太祁曾の神とま
うすは、五十猛有功神といふ意、佐平の二字を切れば曾となる、左に此
御神の有功を稱へた古人の和歌を掲ぐ

千早振神のみいづのかしこさは御世をまもりのたからなりけり

山階二品宗晃親王

山東の庄伊太祁曾の社に詣て

天なるや八十の木種を八十國にまきほどこしゝ神ぞこの神

本居太平

當社には種々の寶物がありますが、其中でも尤難有いものは、近衛院久
安の綸旨、順德院承久の綸旨是等には總て紀伊宮一宮伊太祁曾社と記し
てある)、伏見院正應の請文、南朝後村上帝正平の綸旨、後土門院明應の
綸旨數通、其他將軍家紀侯等より寄附物多くある、此御神は多くの神々
の中で、尤も國民に利益を與へたまひし神にましませば、日本國民たる





者は一度參拜しなければなりません、寫眞は反橋より樓門社殿をかけて
採影しました。

## 根來寺

は那賀郡根來村大字西阪本にある、和歌山より四里十八町、伊太祁曾よ
り三里餘、南海鐵道樽井停車場より三里、宗旨は眞言新義、即ち其派の
一大本山であつて、高野山金剛峯寺に續いての大刹、一乘山根來寺大傳
法院といふ、境内二萬二千百二十坪餘、此山始め役行者が開き、自ら斧の
を以て自己の肖像を刻んで、山神をして守らしめたといふ、其像今護摩
堂に安置してある、其後堀川院の御宇寛治年中、修驗者の根來坊といふ
が此地に來て、行者堂の側に一宇を建立し、豐福寺と名を附け、虛空藏
菩薩を安置した、其後興敎大師(覺鑁上人來つて當寺を建立したのである、
乃ち其興敎大師覺鑁上人は、眞言の碩德、鳥羽上皇の歸依篤く、始め——
長承元年——高野山に大傳法院を草創して、傳法院の傳法大會を行ひ、
座主と金剛峯寺の座主を兼ね、保延元年上人四十一歳の時、營建の願を
終へ、座主職を其弟子に讓り、密殿院に閉籠つて、三摩地を脩せしが、

金剛峯寺の衆徒上人を嫉み疑ひ、遂に大舉して密嚴院に亂入し、上人の定軀を拏づらんとせし所、上人はあらで二体の不動尊の相并ぶを見、一体は必定上人ならんと、其中の惡僧失鏃を以て像の膝を鑽るに、忽ち血

根來寺大塔ノ景

和歌山北口停車場ヨリ四里

The Great Pagoda of Negorodera (Buddhist temple). About eight miles from Wakayama-Kitaguchi Station.





流れて地に至る、上人之を見て聲を揭げ「其は本尊なるぞ、過すな、鑊はこゝにあり、ともかくも計へ」と云つて定を出られたが、さすがの兇徒も此奇瑞に恐れて退散しましたが、上人衆徒の暴行を憎み、明王の像を荷負ふて根來に赴く、數百の清衆皆上人の德を慕ふて根來に來る（今の密嚴堂――俗に不動堂といふ――の本尊、錐鑽不動即是です、此尊像は弘法大師の作）、此事上皇の厳聞に達し、高野山の兇徒夫々處刑され、又上人に勅して高野山に歸らんことを侑めたまへど、上人表を奉つて固く之を辭し、此に圓明寺を創建しましたが、永治元年上皇命じて御願寺としたまふ、是即ち今の大傳法院です、康治二年七月廿八日、上人四拾九歳にて此山で遷化されたのです、以上は根來寺の緣起の大意を採てお話いたしました、以前は大傳法院、密嚴院、圓明寺、豐富寺、小谷、菩提谷、大谷、蓮華谷、西谷、菖蒲谷、三岡、前山等に堂塔伽藍が充滿して、金碧燦然莊嚴一山を輝し、數百の僧侶此に來り、密宗の研究に餘念なく、長く繁昌を保つてゐましたが、建武以來二百餘年の間、世は戰國となりて、弱肉强食の慘況におちいり、軍卒の濫妨が甚しいゆゑ、此山の行人の徒甲冑を着し、兵杖を採つて山を守護したのが始めて、遂には却て他

の地を奪ひ、人の境を侵し、其勢數千に及び、威勢に誇つて大閣の命に從はざるより、天正十三年三月廿一日、大軍を以て攻寄せられ、堂塔伽藍すべて二千七百餘宇、一時に灰燼とありましたが、其後慶長の頃領主淺野左京太夫幸長、命じて根來山の四至傍示を正し、山林の濫伐を禁じ、元和元年紀藩の鼻祖南龍公、法度を定め、東西の阪本に制札をかけ、下馬下乗の木牌を立、其後代々の藩主の保護に依てやゝ舊觀に復し、塔中も七十餘坊ありましたが維新後ふたゝび荒廢に屬し、今は塔中の現在するもの僅に七院、末寺は日本中にて五十寺、併し天正の遭厄の時、海内數百の末寺、大和の長谷寺、京の智積院の二寺に屬しましたが、今尚舊本山の緣故を思ひ、擧つて維持の資をさゝげ、又和歌山其他の地方にも講中信徒あれば、その維持法にさしつかえなしとの事なるが、時勢の變遷とは云へ、かゝる一大名刹の荒廢に屬するは、眞に惜む可き事の限りです、是より現在の堂塔を御案内いたしませう

大傳法堂(文化年中紀公建立)、大塔(大治年中建立、八間四面高さ三拾八間、本尊金胎大日如來「前年盜難にかゝる、可惜々々」根來の建築の内で、尤も結構なものは此大塔である、高野山の大塔前年烏有に歸しましたから





らは、此大塔が日本第一でせう、寫眞も殊に注意して、此大塔を採影しましたが、おりしも日暮でして、十分の功を遂げなかつたのは殘念です)、

御影堂(四間半四面、是も大塔と同年代の古建築)、尤も奇なものです、

角作り、是も同年代の古建築、錐鑽不動堂(五間四面八本尊は弘法大師作の不動、彼の覺櫻上人身代りの靈像)、求聞持堂(是は三百年ぐらゐ前のものと思はる、

文化元年紀公の建立)、聖天堂(寛政年中是も紀公の建立)、

今建築物として殘るものは、此他に七つの寺中があるのみ、

否、千分一にも足りませんが、併し案内者の目には、金碧燦爛として人の目を射た、壯嚴美麗の當時よりは、却て詩的の趣味多く古を思ひ今を感じ、世態の變遷、宗教の盛衰、人心の文野、などゝ種々の相像にうたれて、殊に面白く想はれました、

山内で尤も風景好く、且舊觀を存してある所は、大傳法堂及び大塔の有る所です、堂塔の建築の壯嚴なるに、其前に聳ゆる一樹の老松、髮絲一翁鬚、龍煙鱗皮玉嶙峋、傲雪霜の姿あつて、古塔と相對して懇ろに數百年の昔の全盛を語るが如く思はれ、何人も暫時歩を停めて嘆賞せざるを得ざる場所です、夫より奥の院の不動堂まで

行く道、櫻あり楓あり橋あり水の流れもありて、幽邃閑靜、京都の通天と高尾を一つにしたやうな佳景、奥の院の不動堂の處は、幽邃の極點、閑靜の絶頂、其所に建築奇雅なる八角堂があつて、其中には弘法大師の作の、錐鑽不動の靈像が安置してあるのですから、一度此地に臨む者は、如何なる大俗凡夫といへども、名利の塵念を忘れて、菩提の妙想を發しますし、其堂の前に供米所があつて、六十ばかりの老僧が只一人番をして、こくり〳〵座睡りしてゐましたが、馴とはいひながら此寂しい處に能く一人ゐたものと、料らずも「嵐、木枯、好う堂守の、寢ることぞ」の古句を思出しました、不動堂の前に、蓮の實と蓮の葉に、龍の纏ひたる姿の手水鉢と、獨鈷の形の香爐がある、いづれも青銅の鑄物であるが、頗る名作、粉川住、蜂屋正勝の銘があります、それから、大門に二王尊が安置してありますが、門の構造と云ひ、二王尊の彫刻と云ひ、共に壯大結構、當國第一でございませう、全體に就て評を下せば、此寺は、山深く、地大に、漢文句調で形容すれば、之を望に蔚然として深秀とでもまうしませうか、さすが二千七百餘宇の堂塔が建連ねてあつた所だけあつて、其規摸の雄壯偉大なこと、比叡山高野山は姑くおき、其他に此位





なところはありますまい、殊に案内者が目を驚ろかしたのは

櫻

の木の多いのです、而も皆幾抱へといふ古木の大樹が、入口より奥まで、此廣い山内に充滿してあると云つても好ひ位に澤山あります、花のころは星巖翁が春入櫻花滿山白の吉野の詩句を以て、此山に移して形容して も好しい程です、花と云へば誰しも第一吉野に指を屈しますが、其吉野は古木は漸次に枯れて、今は若木ばかり、古木の多いのは、此山の方が遙に上で、而も堂塔の壯嚴と云ひ、土地の靈勝と云ひ、三景を一つに集めてゐますから、夫こそ古今の壯觀です、寺の傳へに依ると、此櫻は開山大師の手栽だといふことですが、而て見ると八百年にも近い古木です、和歌山の楓亭といふ人の句に「反椀に昔をれもふやまざくら」といふがありますが、花のころ此寺に來て、根來の五器で精進の料理を喫べ、般若湯を傾けながら、花を見つゝ昔を思ふたら、如何さま此上もない面白味でせう、前にも申しましたが、樽井停車場より僅に三里足らず、而も根來街道といふ結構な街道ですから、人力車で往來すれば、大阪から出かけても、其日の中に樂に遊山と觀花の二つが出來ます和歌山よりは

紀和鐵道として和歌山より岩手まで瀧車あり、岩手より根來まで凡一里

常山の什物

は天正の災厄に、或は燒失、或は紛失、其十の九を失ひまして、今殘るところは、僅に烏羽天皇御肖像(開山大師筆)、開山大師影像(烏羽上皇筆)、以上の二幅は紀藩の鼻祖南龍公之を拜覽あつて、薄衣御影の名を稱されたといふ、兩界大漫荼羅二幅(弘法大師筆)、同貳幅(開山大師筆)、同種字二幅(開山大師筆)、佛舍利、不動明王大御劍一振り(長七尺三寸、廣三寸七分、文珠金助重國作、南龍公寄附)、散樂假面二百餘面、太眞公寄附)、茶湯釜(根來山形の釜と云ふ、永久年中京都三條祟三之を鑄て大師に獻ず、一時禁裡の御物となりしが、後又當山に下附されました、鑑査狀が附いてゐる、天下の逸品)、此他にも佛像佛具繪畫珍器等多くあれど略す、次は

## 粉川寺

は那賀郡粉川にある、補陀洛山施音寺といふ、天台宗、西國順拜第三所、境内の坪數一萬坪以上、和歌山より六里二拾町、根來寺より二里以上、先づ境内の諸堂及び名物から御案内いたしませう、本堂十五間に十四間





——鑑賞抄には七間四面の堂とありますが、夫より大きくなつてゐます——本尊は等身千手千眼觀世音、寺傳、童男行者作、脇立は風神、雷神、二十八部衆、觀世音は丈貳尺八寸、風神雷神は貳尺一寸、二十八部衆は三尺、孰も得がたき名作にて、優等の鑑査狀が下附に成てゐる)、御位牌堂(本堂の西にある、千手觀音を本尊として、舊領主代々の位牌が安置してある)、六角堂(本堂の東にある、三十三所觀世音を安ず、順禮納札堂)、行者堂(本堂の乾の方にある、本尊は役の行者の自作)、御供所(本堂の右方にある、湯淺櫻本堂の前左方にある、古木は朽て近年若木を植ゆ、其始め湯淺の人藤原宗永櫻を獻納せしより此名がある、詳しい由來は緣起に見ゆ)、笈掛櫻(本堂の前左方、湯淺櫻の向ふにある、花山院笈を掛けたまふとの傳へ)、丈六堂(本堂の巽檀の下にある、地藏堂(丈六堂の前にある)、茶所(中門の内にある)、參籠所(同上)、中門(大門より内貳町許の所にある、東に向つて入る、四天王を安ず、額は紀公の筆、風猛山の三字楷書、書法遒靈、盥漱盤(中門の下北側にある、銅を以て蓮を造る、亘り六尺餘、高さ五尺)、小社三祠(中門外半町許りにある、八幡、辨財天、春日の三社が並んでゐる、其中の辨財天は、河内國澁川郡馬駝市佐太夫が娘を祭る

The Main gate of Kokawadera

粉川寺の門樓

盛時の其一つ、中島屋(田現地の島中にある、本尊

西にならぶ、(鎮守三田現地)社殿の西にある、十間上空寺の太子堂の太子堂、(鎮守)殿の所と





粉川寺本堂ノ景

和歌山北口停車場ヨリ六里

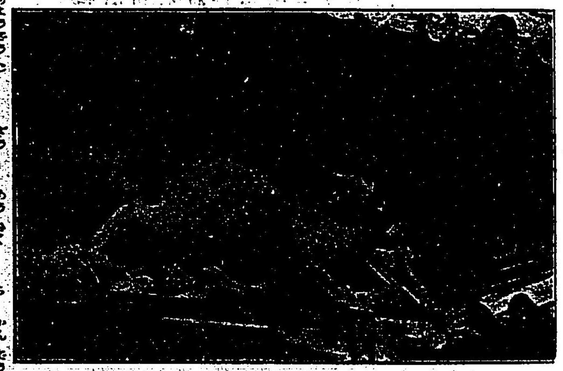


The Main building of Kokawadera (buddhist temple). About 12 miles from waka-yama-Kitaguchi Station.

童男行者の尊像がある)、三角堂(中島堂の側にある、千手觀音を安ず、月高閣の額がある)、馬跡石(田現地の傍にある、童男行者出現の迹)、常念佛堂(御池坊の巽にある、堂中の額は南龍公の筆、又畠山滿家の碑を納む、銘に眞觀寺殿道瑞禪門尊儀、裏書に基國の嫡男、畠山尾張守滿家、從五位下管領、永享五年九月十九日卒、應正二年冬源持國泣血而立とある、又應永二十八年滿家燈明料寄附狀がある、永享三年四月廿一日、義敎將軍參詣の時、持國も陪從して御池坊に宿す)、童男堂(御池坊の東にある、童男行者の尊像を安ず、粉河寺緣起に詳しくある、又童男佛の緣起もある、昔保元の頃、御池の

住侶と一山の衆僧と爭論の時、佛像を擄へて由良の湊長郷に安置し、其後三百三十三年を經て、文明十八年に夢想の爲め舊の如く迎へ奉つたとある――此堂は頗る古き建築にて、一面に種々の花卉又は天人樂器などを彫刻し、彩色がしてある、甚五郎の作といふ傳へ、實に結搦な堂です、楊柳井(童男堂の前にある、九井の一つ、大石を以て覆ふ、)地藏堂(御池の西南にある)、傳大士堂(不動堂の南にある、此堂も前の童男堂と同時代の建築、やはり甚五郎の彫刻が堂の四面に施してある、堂内に安置せる傳大士堂の南にある)、傳大門(本堂まで三町許り、北に向つて入る、昔は三條院の震筆にて、施音寺の額が掛けてあ

粉川寺左甚五郎作虎ノ彫



The Wooden tiger of Kdkawadera,engrared by the famous artst, Hidari Jingoro.





つたのですが、兵火の爲に燒失しました、雪玉集に此額の沙汰が出てある)、大門橋(大門前一町許の所にある、此下の流が粉河)、わくやの井(大門前半町許り、二九井の一つ)、彫物の虎(御池坊の左手の軒に揚げてある、虎の勢ひの好きはいふまでもなく、竹の子なども不思議の出來、あまりに結搆ゆゑ、試に寺僧に問ひしに、元は日光山にあつたのを南龍公が幕府より拜領せしが、あまり大き過て殿中にれくは不都合とて、當寺へ寄附になつたもので、左甚五郎作との傳へ、是は雄虎にて、今一つ雌虎がある、夫は庫の裡に入てあるとの話、其傳來の是非はさておき、あまりに絶妙の彫刻ゆゑ、例の好奇心から、寫眞に採影して、諸君にその美の一般をお目にかける)、當山は草創以來千二百十八年、高野山の開基に先たつこと四十七年、其後七回建替に成り、目今現在の伽藍は享保五年の建立(其以前正德三年燒失)他力の普請とは云へ、當地の出身て、其頃大阪に住でゐた粉川屋某が一手にて建たやうなもの、其家今より五十年前に沒落して當地に歸り、一家の人々當寺の世話に成て死去、今は其迹も絶たと寺僧の話ですが、粉川屋は絶滅しても、粉川寺の建築の世に在んかぎりは、其某の丹精は亡びません、當寺に參拜する人は、第一

に拜むべきは本尊と脇士のありがたき佛達、次には童男堂、傅大士堂の建築彫刻、さては御池坊の虎の彫物、之を見のとしてはいけません、當寺昔は坊舍二十二箇あつたさうですが、今に御池坊其他八九坊よりありませんが、併しその繁昌は昔に劣りません、粉川寺の奥より和泉國の八大龍王峠を越て紅葉の牛瀧山に至るこの路嶮艱なれども奇景尤多し

法會

抑も二月の舊初午ごろより陰暦四五月の和歌祭のころまで、參詣人格別多く、殊に高野山の御影供(陰暦三月廿一日)花供(陰暦四月廿一日)の頃は大々的の繁昌、一年平均、一日に三百人以上、其内順禮は十分の一、京阪關東四國九州の人にて、高野參詣をかけて來る者十の九、一年中の重なる法會は舊初午、陰暦七月九日十日(施餓鬼)、同十一月十八日(開扉、本尊出現の日)、同六月十八日(祭禮)、同正月十四日(左義長)、同三月十八日(緣日)、同八月十八日(大曼陀羅會)、此日はいづれも參詣人群集せるが、六月の祭禮は殊に名高く、紛川車樂とて一種異樣の車樂を多く引出し、和歌祭についての賑ひ、松屋翁祭禮を見るの記あれど、事繁ければ爰には省きます、





當山の緣起

寶龜元年の草創の事を始め、貞觀年中より壽永年中までの靈驗三十三ケ條を書し、尋常の寺院の緣起とは異なつて、古書に徵する事多く、世に珍らしく結搆な緣起、此緣起は寺傳では、書は堤中納言定家卿、畫は鳥羽僧正、古寫本の奥書に、應永十九年十一月三日、依法水院僧都長算所望於三條坊門室町扇屋書寫本勘解由小路入道殿御說云々とある、元亨釋書、以呂波字類抄、塵囊抄、玉葉集、風雅集其他古書に當寺の事を記すものは、皆此言に依てある――今其内の要を摘で、左にお話ししませう

當山は光仁天皇の寶龜元年大伴孔子古の草創、此地は北は葛城の嶺に連なり、其山足、南方に延緣し、別に一峯を起す、之を風猛山といふ、昔は林樹蓊鬱人迹稀なるゆゑ、禽獸の住所であつたが、其近鄕に大伴連孔子古といふ武夫があつた、其子を船主といふ、船主は鎭守府の軍曹に任じられて奥州へ赴任した、孔子古は射獵を業として、常に風猛山に分け入り、身を樹上に屏して、夜な〳〵猪鹿を窺つてゐた、一夜孔子古が左の眼眦に當つて、光明赫奕として、大笠程の光物が見へた、孔子古奇異

の思ひをして、急に樹上を下り、光明の放てる所へ往きましたが、往けば往く程其光が遠ざかり、歸れば又元の如く、更に定る所がない、此く光を現ずること三四夜に及んで、やう〳〵其地を認め得た、其所で孔子古は、我宿因あればこそ此る瑞光には逢ふなれ、願くば、其地に精舍を建て佛像を安置したいものと、心に深く思占めて、旦づ其處に紫庵を結んでゐると、一夕美麗はしい童男行者が來て、其家に寄宿てくれといふ、孔子古之を諾ひますと、行者大ひに悅んで、檀越どの、何まれ願ふ事があらば、我助けまゐらせんといふ、孔子古其語を嬉みて、彼の光明を放てる地の草庵に、佛像を造りたく思へど、佛師なくて未だ願ひを果さぬ由を語ると、行者うなづいて、幸ひ我は佛工なれば其願ひを遂げまゐらせんといふ、孔子古大に歡び、我此願ひは法界衆生の爲、乘ては我子船主が奥州より無恙なく歸鄕せんことを祈る爲め、此くは思ひ立たのであると其こゝろざしを告げて、即ち行者を伴ふて先草庵の地に往きました、すると行者は孔子古に對つて云ふやう、我此庵中に籠つて、七日の中に佛を作るが、其間ゆめゆめ來て見たまふな、造り畢へなば、我汝の家に往て門を叩ん、其時來りなば必す新佛を拜みたまはんと、此く言を契つて





行者は草庵に入て戸を閉ぢ、孔子古は宅に歸り、七日の間精進潔齋してゐました、さて其日になると、ほと〳〵と門の戸を叩く聲のあれば、孔子古は之を聞て、彼の佛像の造畢を告るならんと、あはてゝ走り出て見ましたが、人の影さへ見えず、怪みながら彼の庵へ行て見ると、行者はなくて金色の千手觀音の尊像、自然に出現してゐたまふ、孔子古の歡喜大かたならず、是より弓矢を投うち獵事を廢て、一心に佛法に歸依しました、此に又河内國澁江郡馬馳市に、佐伯某といふ長者あり、世に佐太夫といふ、其愛女病に沈み、醫療の手を盡せども更に驗なく、嘆き悲んでゐる所へ、彼の行者其家を訪ひ、千手陀羅尼を誦して、懇ろに加持を加へたが不思議にも其娘の病ひは名殘なく痊へました、佐太夫の喜悅限りなく、家に貯へし夥多の衣物を悉く布施しましたが、行者は固く辭んで受けず、只其中鞘附帶一條を受て歸らうとしますので、佐太夫飽かぬ事に思ひ、其住所を問ひますと、紀伊國那賀郡風市村粉川寺と答へて、遂に何所ともなく立去りました佐太夫喜びのあまり家眷を率ひ、數多の布施物を持せて、風市村に尋ねて來て見たれど、粉川寺といふ寺がないゆゑ、不審く思つて土人に問ひましたが、誰も知る者がありません、せ

んかた無くて山中を此所彼處徘徊してゐる中、不圖溪流の粉裝のやうなのを見つけ、是ぞ粉河であらうと曉つて、流に隨つて林中に分入りますと、一宇の草堂がある、其時日すでに暮に及んだので、まづ庵の戸を開けて這入るに、燈もなくて尤暗く、佛像は見にませんが、花を採り几を列いて之に對ひ、皆一同に疲れて寢てしまひました、すると奇異なるかな夜半ばかりに、佛前の燒盡自然に火を點し、堂内煌々として目眩きばかり、佐太夫之に駭ろかされて仰ぎ見まするに、觀音大士の尊像が儼然として立ておられた、而も先に行者に施した鞘附帶が、觀音の御手に繫つてゐたので、さては行者は觀音の化身にてこそまし〳〵たれとて、感嘆驚禮して、一家悉く出家し、懇ろに觀音に仕へ奉つた、又伊都郡澁田村の孀姉大刀自は、彼の草庵の狹隘を嘆ぎ、己が家を移して觀音の本堂とし、郡中名手村の女某は、己が宅を攘つて禮堂に施入しました、此で精舍の結搆備はり、朝野の歸依篤く、正歷二年冬、華山法皇は、熊野の山より下向の次に當地に通夜したまひ、後白河法皇は、當寺に藏せる三尺の尊像を移して、京都三十三間堂の側、小千手堂の本尊としたまひ、攝關家も亦信仰厚く、永承三年には宇治殿、永保元年には松殿、各々先蹤





を遂つて參詣あり、將軍家にては、應永二十八年には足利義持公、永享三年には足利義教公など、御臺所と共に香華を取り給ふ、是彼にて漸次に隆盛に趣き、堂塔も其數五百有餘に及びしを、天正年中豐太閤の大舉に、一時焦土となりましたが、慶長以後天下治平に屬し、佛法の繁昌と共に又舊に復し、度々火災にかゝりしも、他力にて再建になり、大士の妙智力實に廣大無邊、當國希有の一大靈場である、寫眞は、中門より本堂をかけて採影したのです、又此寺の事の物の本に見えしは延喜式、枕草子、玉葉集、伊呂波字類抄、蓋蠬鈔、風雅集、爲家卿家集、新拾遺集、耕雲千首、爲村卿三十三首、賴道公高野詣記、狹衣物語、源平盛衰記、山家集、沙石集、雪玉集、其他尙ありますから、左に一二首ありますが、あまり事長くなりますから、左に一二首

粉川寺勸進三十三首の中　爲家

傳へ聞く粉川の水のいかばかりもとの光の月もすむらん

同　爲村

わきてすむ粉川の寺の秋の月てらすものりの光なるらし

つきじ猶のりのたむけにかげそふる粉川の水のふかきにしは

修行せさせ給ひける時粉河觀音にてれ札かゝせ給ひ

「けるれ歌　花山院御製

むかしより風にしられぬ燈のひかりにはるゝ後の世のやみ

鶯のこゑは、はつ音のほとゝぎす　宗祇

## 靈地靈跡

山内に四地の靈地と唱ふる所がある、是は寛德年中に仁範上人の撰めるところ、第一光明地(金堂の敷地、是則ち觀音大士光明を放つて靈場を示した地)、第二跋木地(金堂の東南、茂林鬱々たる所、是則ち孔子古が獵場の樹上より光明を認めし地)、第三出現地(金堂の西南二丁許にある、是則ち大士が孔子古の發願を助けん爲、童男行者と化し池水を分て現れし地)、第四寶鐸地(金堂の東北、則ち今の律院の所、昔東大寺の覺鑒上人、此所に堂を營みをり、土中より寶鐸一口を得たる地)、又粉河八景といふがある、享保頃の堂上十六人の詩歌並に文があるが、夫は畧して只名のみを掲ぐ、補陀曉鐘、粉河清流、風市樓花、紀川風帆、妹脊秋月、葛城晴嵐、高野積雪、淡島落日、——是に又、前に風猛山(寺の後の山)をおき、後に粉河源は風猛山より出て寺の内を流れ、大門前にて中津川に合流し、粉川





の市中を流て、紀の川に入る)を添へてある、山にも、川にも、同じく詩歌が添へてある

## 寶物什器

澤山ありますが、其中の二三を摘めば、第一に結構なるものは緣起(書、堤中納言定家卿、繪、鳥羽僧正——昔年火災に罹つて、ところ〳〵燒し所のあるは惜むべきですが、鑑識家の云ふ所によれば、繪の鳥羽僧正たることと疑ひなきのみならず、彼の有名なる志貴山の飛倉の卷にもいや増る出來だといふことです、心ある人にして此寺に參詣するならば、本尊と脇士と此繪緣起と、童男傅大士の兩堂と、甚五郎の虎は、是非とも拜觀せねばなりません)、大政官符一卷、後光嚴院宸詠一幅、當時古伽藍圖一幅、銀帝王畫像一幅(絹本設色、小野篁筆)、五大尊畫像五幅(絹本設色、巨勢金岡筆)、千手觀世音畫像一幅(在原業平筆)、緋袴一具(在原業平寄附)、鞘附帶(澁川郡左太夫長者寄附)、倫紙令旨內書執達狀等拾七通、蘆鴈、觀世音、柳鷁三幅(土佐光起筆)、太刀一口(直燒白鞘、相州國次作、寄附人不詳)、大古瓶(素燒、四斗七升入、鑑査狀下附)、風粉山八景詩歌貳卷、以上——序に一寸粉川町を御案內いたさう。

## 粉河町

は伊都、那賀、兩郡の中央にて、土地廣く、南は高野山に通じ、紀の川に添ひて上下運漕の便がある、夫のみならず、西國第三番の觀音こゝに在せるを以て、四方より參詣の旅人絶間なく、山間あがら相當の繁華を保つてゐる、戸數千三百戸、名物の第一は粉河酢(町内に釀造家三戸あつて、一戸に三百石より四百石を造る、即ち粉川の水を用ひて釀す、其味他に勝る)、粉河蒟蒻(製造する家澤山ある、つゝと蒟蒻の製他に異なる)、粉河團扇(もしほや、菱屋の二戸にて製す、和歌浦蘆柄を佳品とす、其形あふひ形、なすび形の二種ある、袋に歌三首を記す、其歌は

夏をさへうちわすれてぞくらすべきわかの浦風手にまかせては　中院通茂卿

行て見ぬわかの浦涙かゝるにによせずばしらじ蘆の葉がぜを　武者小路實陰卿

和歌の浦の蘆邊の風のすゝしさをこゝながらにぞ手にまかせつる　高松三位重季卿





わかの浦の蘆してつくれりとてやんごとなき人の御もとより賜りたる團扇にかきけるふんづきばかり

紀の海はすゝしかりけり蘆邊より涙うちはふるあきのはつ風　加茂真淵

です)、鑄物師(範頭左兵衛といふ、元祖は吹井福芳、弘法大師請來の佛器を鑄た家、今は姓を福井と改む、又峰屋といふもある、其祖源時勝、南都東大寺の佛像を鑄る、此孫俊勝、弘法大師高野山草創の頃より此地に移住したといふ、前の根來の不動堂の前にあつた、遺の葉の手水鉢の作者も、此子孫と思はれる、宿屋(金河屋が第一)、青樓(三軒あつて藝妓が十三人あるといふ、是もつひでに——是より和歌山市近在の名所二三を御案内まうして、此記を終へませう際限がありませんから——

## 慶德山長保寺

は海草郡濱中村にある、宗旨は天台、本堂(方七間、本尊釋迦如來、額字大雄殿)、多寶堂(本堂の右)、誕摩堂(本堂の東)、食堂(本堂の左横)、阿彌陀堂(同左)、鐘樓堂(同左)、大門(金剛力士、古色不凡)、本坊陽照院、子院數ケ寺)寺は一條院の勅願所長保年中の草創、是寺號の因て起る所、開基は慈覺

大師の門徒、應永年中に眞言に改宗、七堂迦藍、子院十二箇寺といふ大刹であつたが、衰亂の世に際して一時廢絶、夫が爲綸旨院宣の類も紛失して一も遺るものなしといふ狀況であつたが、寛文六年に舊領主德川侯の命に因り、元の天台に復宗し、夫と同時に德川侯より修理を加へられ、且誓提所と定められて、鼻祖南龍公を始め代々の墳塋皆此にある、殊に南龍公の墳塋の如き、其廣大壯嚴目を驚かすばかり、大門の額に慶德山長保寺と書し、裏に應永二十四年六月一日、妙法院御筆とある、是に依れば今の堂宇は應永再建のまゝと見える、棟宇矮狹、彫鏤の飾りは少なければ、規摸朴質、古色のあまりあるところ、又一覽の價ひがある、不出世の英主南龍公の墳塋のある所、一度參拜してその英風を仰がざる可らず、當所は和歌山を距る六里强、石橋雲來翁の長保寺の詩幷に引とも、好く其實景を描いてあるゆゑ、左に

## 長保寺　石橋雲來

一層塔影六僧房。足見王侯遺業昌。疊石爲門鐵爲柵。巍然墳墓據高岡。

寺曰慶德山陽照院。在海草郡濱中村。爲天台宗。長保中慈覺大師門徒所創立。一條天皇勅建之。而故若山藩主二位大納言源頼宜卿。以此山爲墓田。山





上列墳塋。其廣且大。足以見當時盛業。住僧瑞樹堯海。與余有舊。訪之留宿焉。

## 南叡山大同寺法華院

は海草郡有功村大字六十谷にある、天台宗、本尊藥師如來(座像一尺八寸、傳敎大師作、赤栴檀)、握り佛堂(本堂の後面山道の側にある、慈覺大師當山にて如法經修行の時、自ら泥を持て握り固めて造つたもの、其大さ五六分より二三寸、黃土を握固めたやうで、自然と塔の形を成してゐる、世に握佛といふ、實に殊勝のもの、始めは此所、彼所に散在してゐたのを、今は集めて小堂を作り之を覆へり)、本堂の北西の峯(慈覺大師直筆の妙經を收めた所)、後鳥羽院陵(本堂の北の山の半腹にある)、當寺は平城天皇、大同年中に、傳敎大師に勅して建立させたまふ所、其後鳥羽上皇熊野御幸のおりから、鳳輿を此山に廻らして、堂塔再興の勅を下し、御陵を築いて二世の御祈願をしたまひしところ、當國有數の靈場、當寺の寶物天台大師の畫像は、延曆二十三年傳敎大師入唐して天台山に登り、弟子義眞和尙に寫させ、歸朝の後當山に納められた、本朝無二の優品、――和歌山市を去る一里餘。

## 鳴瀧

は同郡有功村大字園部にある、和歌山市を距る一里餘、當所は瀧と紅葉の名所、云はゞ泉州の牛瀧と犬鳴を一つにしたやうな土地、而も自然に其地の名の一字つゞを取て名としてあるも一奇、金剛童子、不動尊、辨財天の祠、所々に散在して、幽邃閑雅、山本惟恭の遊鳴瀧詩序の詞、能く其趣を盡してありますから、左に其一部を出します

鳴瀧者在府城之北一里蓋葛嶺之區別云、山中有瀧國俗謂瀑爲瀧故名焉、其地丘壑窈窕松檜鬱茂、有大悲之閣、有小角之祠、清幽閑寂、不可具狀、去都如此其近而出塵如是其遠、亦吾紀之一勝境也、（下略）

## 愛陽山知足院總持寺

は海草郡野崎村大字梶取にある、淨土宗西山派、和歌山市より三十町足らず、南海鐵道停車場に極めて接近す、本尊阿彌如來（座像長六尺、佛工淨而の作、白毫に佛舍利を嵌す、前の本尊は立像の彌陀、當山十四世行清上人此像を深く信ぜしが、上人入滅の日、此本尊壇上に慟哭踊躍した





るを以て、世に踊佛と唱へ、今は内殿に安置してある）、當寺は後花園院寶德二年の建立、開祖は明秀上人、後奈良院、正親町院の兩帝官寺となされぬ、西山派の檀林七ヶ寺の其一、末寺八十餘ヶ寺、枝末を併して二百八十餘ヶ寺、當寺の寶物の中殊に名高きは畫像彌陀如來、惠心僧都筆（高野山遍照院にありしを、桑山法印母の菩提の爲、現米三百石に代へて此寺に寄附せるもの）、元祖法然上人眞身の舍利三顆、元祖大師色形の御影（以上）

## 終りに臨んで

紀州は日本の中でも殊に早く開けた國でありますから、名區佳境の多きこと、全國に冠たりと云つても好いくらゐですが、夫を一々御案内まうしては、一年かゝつてもおか〳〵終りません、夫故前にも申す通り、和歌山市及び和歌山市の近傍の、神社佛閣名所舊跡――夫も極めて概略を御案内申して、此度は是で御免を蒙ります、高野熊野その他の御案内は更に又いたす事といたしませう――夫から、是は紀州には限りません、掘泉兩州とも――御案内申した場所でも、案内者の見おとし、否、書も

らし、又見あやまり、否、覺に誤りもありませうから、諸君、實地に就き、且書籍に依て御正しを願ひます、何分催々の日數、否、一小冊子に掘泉紀三州の名勝靈區と新事物とを網羅して御案内いたすのですから、とても十分にまうし上げる事は出來ません、其段は御容赦を願ひます——夫から案内者の言語の拙劣なのと、談話の紛擾のと、且は申上ぐる事の順序の一定しないのと、其他不都合の件が多くありませうが、是も諸君の聞上手を以て案内者の話下手をれ補ひ下されんことを偏に願ひおきます——

此御案内は三十年六月の中旬に口を開き始め十一月の中旬に曆を結びましたといふと、月を閲すること六、日を經ること百五十日餘、隨分長い間かゝつたやうでございますが、其間他の事業と炎熱に妨げられ、又は二度二堅に侵されましたから、正味二ヶ月、則ち六十日、夫から、四月一ばいは、掘泉紀の間を巡覽し、又材料の蒐集に費しましたから、夫を併せると、都合三月則ち前後九十日の間に脱稿たのです

此御案内をするにつけ、材料の蒐集、勝區の案内、故事の説明等に就て、尤も周旋示教の勞をいたされしは、泉州にては貝塚感田神社の神官大石清次君、樽井の柳原信君、紀州にては紀伊日々新聞社々員中山





昇三君の三氏なれば、終りに臨んで恭しく一言の謝辭を呈します、又余が泉紀兩州の山河を跋渉するの間、始終同行して介抱の力をいたされしは、南海鐵道會社の中村君なり、是又厚くお禮を申します。

南海鐵道旅客案内下卷終

○南海鐵道旅客案内抜こゝ

昔の五里は今の五十里、十日の程は一日のうちの行きかひとなりしより、花紅葉の名所尋ぬる雅俗、年々に殖ゆるにつけて、鯛見ぬ里も山葵なき浦も、鹿千鳥の聲の遠ざかりて、糸竹の調の耳近うなりしを、遺憾しと眩くもあれど、藁葺は瓦屋にあらたまりて、西洋擬ひの高樓さへ建ちまじり、柴苅る童汐汲む少女も、所訛りに都言葉の端々をいひならひ、牛追ひし徑も車遣る大路と、ひらけしことを歡ぶもあり、げには天然の寂しき山水を人造の賑はしきにかへたるはかこつかたの無きにしもあらねど、又新しき詠め處の出來しとゝもに、其邊の古跡どもの世に知られざりしも漸々に著はれて、さる心なきも道の序に、埋もれ

し碑に立ち寄りて、忍ぶの露を拂ひ、欠けたる瓦を拾ひて、橘の香を懐しむことを、まねぶ人多くなりぬると、藥の泉をあそこゝに見出して、病を除き生を養ふ助けのふたるとは、昔にまされりと言はんも亦けしうはあらじ、こゝに宇田川ぬしの著はされし、南海鐵道案内記は、さきにみづから其地に杖を引きて探り回り、名所舊蹟は從來の書と今の考へを合せたるうへに、新しき事どもをも書き加へ、はた古戰場には當時の鬪ひの大畧を、傳記口碑により て記し載せられたれば、地理に歴史の伴なふ學びのうへにも益ありて、唯月雪に遊ぶ便ばかりにはあらずおん、寛政年間秋里籬嶋がものしたる圖會は、其頃の姿を寫し出しなれば、既に古の風景にあらずなりたる所も多かりしならんを、今また見れば其頃とは改まりたるが少からぬを思へば、此案内記も後の見ん人は此所も彼處も其さまいたく變りにけり、此著者が筆取らんとて見巡りし時にはいかに心も脚をも勞らしぬらんと、今の世の便よきをなほ迂遠く思ひやりて、其功を譽め稱へなんかし

明治三十年十一月

久保田蓬菴

# 南海鐵道旅客案内下卷正誤

| | | |
|---|---|---|
| 下卷 四十一ページ | Wakayaud ハ Wakayama ノ誤 | |
| 仝 四十九ページ | kitaguchi ノ k ハ「カヒタル」ニ改ムヿ可シ | |
| 仝 七十一ページ | Kinnidern ノ Kii ヲ Ki ニ改ムベシ | |
| 仝 ページ | wakayama ノ w ハ「カヒタル」ニ改ムベシ | |
| 仝 九十一ページ | linia ハ Linja ノ誤 | |
| 仝 九十八ページ | Fro m ハ From トスベシ | |
| 仝 百四十一ページ | Dwilding ハ Building ノ誤 | |
| 仝 百四十二ページ | Kakawadern ハ Kowadern ノ誤 | |
| 仝 ページ | Engraved ハ Engraved ノ誤 | |
| 仝 ページ | Artst ハ Artist ノ誤 | |

明治三十二年六月十九日印刷
明治三十二年六月廿二日發行

版權所有

編述者　大阪市東區北濱三町目六拾一番邸　宇田川文海

編述兼發行者　大阪市南區難波新地六番町　南海鐵道株式會社

右代表者　大阪市東區神崎町百三番邸　今井情

印刷者　東京市神田區美土代町二丁目一番地　島連太郎

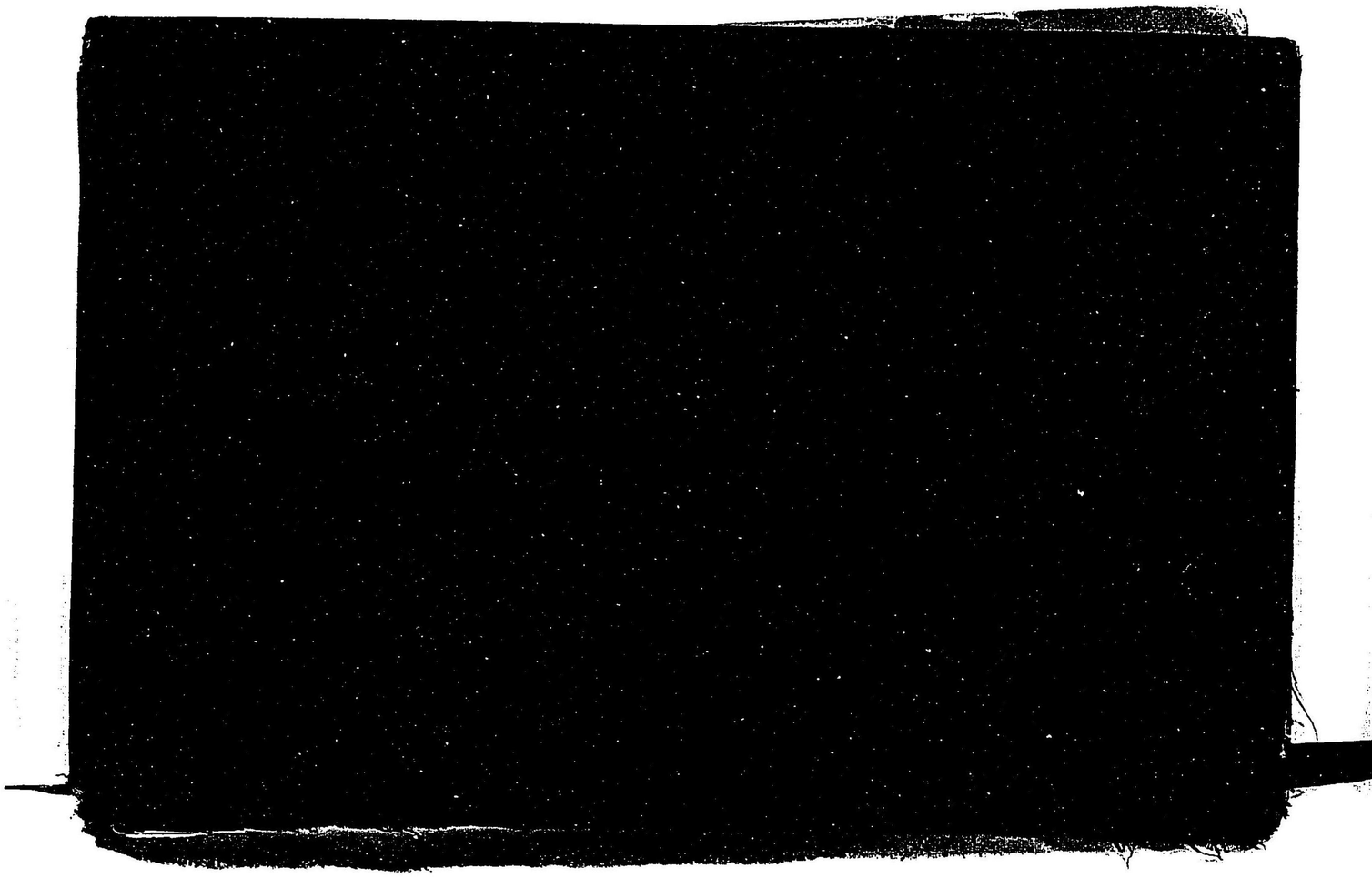
印刷所　東京市神田區美土代町二丁目一番地　三光社

寫眞版印刷　東京市京橋區築地南本郷町六番地　原田印刷所

80
212

塘停車塘之景

80
212



80
212

025577-000-0

80-212

南海鉄道案内

宇田川　文海／編

M32

ADC-3068